



ひこばえ



発行 京都教区教化委員会
共同教化部会(仮)
075-351-5260
kyoto@higashihonganji.or.jp



丹波第1組 懇談会

現代の
“最先端”の地で

京都府南丹市美山町。京都縦貫道園部インターから山あいの道を30分ほど走ると、京都市内と福井県を結ぶ国道162号にぶつかる。古来より、若狭湾で獲れた鯖は塩漬けされて徒歩で都に運ばれた。着いた頃には絶妙な塩加減になって珍重されたことから、通称「鯖街道」とも呼ばれる。近年は「かやぶきの里」として知られ、静かな山村が点在する丹波第一組を再訪問した。

■3月2日(土)午後2時、
■組内推進員幹事(11名)
■推進員役員(3名)
■満林寺役員(1名)
■組長・副組長
■共同教化部会主査・駐在教導

▼丹波第一組の寺院数は12ヶ寺に対して住職は4名。一人で複数寺の代務を兼ねておられる。前年度訪問時に話された解散寺院の話は印象的であった。▼今回は推進員研修会を兼ねての第2回懇談会実施となった。

「教化の現場でおもうこと」をテーマに、それぞれの家、寺、組で行われている教化の現場で感じることを話し合った。▼現在も無住寺院の本堂に、毎日門徒が持ち回りで仏飯をお供えしたり、毎月の寺掃除や御命日の集いをしているなど、自分が生まれ育った美山の寺を守っていくという意識で繋がっておられる。▼しかし寺の役員は自治体や諸団体の役員を複数掛け持ちしており、集落の門徒は数軒、動ける者が数人では30

50年後どころか、10〜20年後の想像ができないなど、苦しい現状を吐露された。▼現在、少子高齢化・人口流出・過疎化は全国各地が抱える課題である。今後、多くの地域が美山と同様の問題を抱えることになるだろう。その点において、美山町はまさに現代の最先端をゆく地域と言える。

「寺はみんなが集まれる場や」



以前は囲炉裏があった本堂脇の部屋で班別座談

変わるものと変わらないもの

参加者の声

◆古くから美山の寺では、報恩講で門徒が袴を付け、助音として出仕する伝統が残る。しかし、後継者の不足や伝承の困難に加え、コロナによる縮小により近年は数か寺のみの実施となっている。そのことに寂しさを感じる方もおられる一方で、門徒感話を実施する寺や、法話の後の座談会

をしたなど新たな形を模索する動きもみられる。

◆ある参加者が、若い頃の葬儀の思い出を話していた。当時の住職は、自宅での通夜のあと、全員が座敷に車座になり、故人との関わりや思い出を一人ずつ語り合うことを習慣化していたこと。今では住職もいなくなり、葬儀も簡素化され、教えを聞く場も少なくなることが寂しいこと。門徒も少ないので、寺に全門徒が集まっても10人ほど。だからこそ、こうした推進員の集まる場はみんな一緒に正信偈を唱和するだけで楽しいこと。死ぬまで教えを聞く場(寺)があつてほしいなど、時代の変化と相続されてきたことを語られた。加えて今年から一年間専修学院に通い、教師資格取得を目指す後継候補者が帰ってくることを楽しみにしていると笑顔で話された。

雑感

総じて積極的にご意見をうかがえた。他の集まり同様、過去にできていたことが過疎・高齢化により維持できなくなったことを嘆く意見が多かった。特に若年層といっても50代の方々でも仏事を敬遠する傾向が強くなっていることがうかがえた。

また住職がいる寺院と、代務でお勤めをしている寺院との活動内容に差があり「不満」というよりは「寂しさ」を感じる内容であった。「当たり前」でしていたことが、その大切さを教えずに来たことも一因にあるだろうが、環境の変化時代の变化に対応できずただただ縮小していることが今後への不安につながっている。5ヶ寺の法務を預かるものとして、行事をする際には、

「ともに教えを学び、語ることができ場づくり」をしたいと、今後の継承のために気を引き締めた。

丹波第一組副組長

黄楊川淳

